

シャルトル大聖堂のステンドグラス

《Baie 48 : 聖ヨハネ伝の窓》

——その 1 ——

高野 禎子

A Propos de la « Baie 48 » de la Cathédrale de Chartres

—— 1 ——

La « Baie 48 » de la Cathédrale de Chartres raconte l'histoire de Saint Jean l'Evangéiste, considéré au moyen âge comme l'auteur de l'Apocalypse.

C'est un des plus anciens témoignages iconographiques qu'on ait conservé d'un cycle narratif sur la vie de S.Jean.

Première lancette du bas côté sud, cette baie est composée de quadrilobes empiétant sur des demi-médallons. Nous étudierons successivement :

1° L'emplacement de ce vitrail ;

2° La description des épisodes conservés, mais nous aborderons dans nos articles futurs la question des déplacements possibles de certains des panneaux. Les scènes observées : La fuite en Egypte (panneau remployé), les donateurs armuriers. Et les scènes de la Vie de Saint Jean : pour suivre l'histoire nous commençons par les médaillons latéraux en allant de gauche à droite et en montant ; puis les médaillons quadrifoliés qui forment une seconde série ; cet ordre de lecture des panneaux donne :

S.Jean exilé à Pathmos,

S.Jean rédige l'Apocalypse,

Résurrection de Drusiane et les témoins,

Les 2 jeunes gens qui brisent les pierres précieuses en présence de Craton,

Miracles des pierres précieuses et de l'or,

Mort de Stactée,

S.Jean devant Aristodème,

S.Jean boit la coupe empoisonnée,

Apparition du Christ,

Dormition de S.Jean ; des rayons de lumière tombent du ciel sur lui.

3° Technique et l'ornement : nous nous intéresserons particulièrement à l'usage de la grisaille sur la face externe de ce vitrail, notamment scène No.15 (Apparition du Christ).

Nous poursuivrons notre recherche par : L'étude des sources, en comparaisons avec le manuscrit « Français 403 » de la Bibliothèque nationale de Paris. Puis, nous dresserons le catalogue des vitraux de la Vie de S.Jean (environ 12 ensembles) en France et en Angleterre.

序

聖ヒエロニムスは「ヨハネ黙示録註解」の序文で次のように述べている。

《 Apocalipsis Iohannis tot habet sacramenta quot verba 》

つまり「ヨハネ黙示録にはそこに書かれた言葉の数だけ‘サクラメンタ’がある」というのだ。ここに言う‘サクラメンタ’（*sacramentum* の複数形）とは、神の救済計画を目に見える形で示す聖なる徴を意味し「秘跡」と訳される。崇高な真理である神の教えを「秘跡」により近づき易くするためのものとされている¹。

「ヨハネ黙示録 *Apocalypse de Saint Jean*」は新約聖書の最終章に置かれた書物であり、旧約と新約とを合わせた聖書全体の末尾を飾る預言書でもあった。黙示録には多くの象徴言語が用いられているため難解かつ多義的な解釈を可能にし、近づきがたい印象を読む者に与えてきた。冒頭にあげた聖ヒエロニムスの一文に集約されるとおりである。

12 世紀半ばから 13 世紀前半にかけて建立されたキリスト教聖堂の内外を飾る彫刻、壁画、ステンドグラスにおいて、主題としての黙示録の占める役割は極めて重要である。近年多くの研究者がこの点に注目して興味深い研究を発表している²。

本稿では「ヨハネ黙示録」著者としての聖ヨハネとヨハネ伝図像に注目する。具体的には、北フランスのゴシック大聖堂で登場した「聖ヨハネ伝」のステンドグラスについて考察することになる。特に 13 世紀初頭シャルトル大聖堂の「聖ヨハネ伝」のステンドグラスに関して、これまであまり問題にされることのなかった「黙示録」の著者としてのヨハネ伝図像を考察の対象とする【図 1】。

今後数回に分けて論文を執筆する予定だが、第一回となる本稿では、シャルトルの《Baie48：聖ヨハネ伝の窓》の現状について紹介し、問題点を提示する。

I. 問題の所在

シャルトル大聖堂には 176 枚を数えるステンドグラスの窓があるが、それらが立案・構想され現存する殆どは 13 世紀前半のことであった。この時期に「ヨハネ黙示録」は時代の主要な関心事であったことを改めて喚起しておきたいと思う。仮に構想者の念頭にあった関心事が「黙示録」世界であったとすれば、他の多くの窓の個別主題を追うことは重要であるには相違ないが、沢山の情報に紛れ却って物事の本質を見失いかねない。ここで黙示録の著者聖ヨハネに注目するのは、176 枚の窓全体の総合的なプログラムを視野に入れてのことである。

本稿ではイヴ・クリストの一連の研究が出发点となる。特に 1999 年のクリスト論文では、シャルトル南正面の中央扉口にある「最後の審判」を、同じく南正面左扉口の「殉教者の扉口」との関わりから新たな解釈が提示された³。私自身はこれまで大聖堂の三つの薔薇窓に関心を抱きながら、これら複数の扉口彫刻との関連性について考えてきた。そう

した経緯から南薔薇窓の主題である「ヨハネ黙示録」に注目している⁴。

先述のとおり、今後数回に分けてこの問題を論じる予定だが、第一回は「現状と問題点」を整理して示す。第二回は、ヨハネ伝図像の源泉を問う。特に注目したいのは、すでに先学により指摘されてきたことではあるが、パリ国立図書館所蔵の黙示録写本【Français 403 番】との関連性を問題にする。この写本を詳細に検証して、ステンドグラスのヨハネ伝とアングロ・ノルマン系統の黙示録の本文並びに註解文、挿絵との関係を考察する。第三回は、フランス各地に残る聖ヨハネ伝のステンドグラスを、昨年度前期に行った現地調査に基づいてカタログにまとめる。その結果を報告して、他の大聖堂の窓とシャルトルの窓との間に見られる共通点と相違点を調べる。最後にそれらを総合的に判断し、妥当性のある結果が出せたらと願っている。初めにテキストとしての「ヨハネ黙示録」について簡単に触れておく。

Ⅱ. 「ヨハネ黙示録」とは

「ヨハネ黙示録」（以下「黙示録」と記す）は一連の幻視によって構成されている。まず初めにエフェソスを中心とする小アジアの7つの教会に送る手紙の口述で始まる（第1章～第3章）。次に、天使7人が登場して天からの啓示が与えられる（第4章～第16章）。バビロンと異教の国々の滅亡が語られ（第17章～第18章）、最後には、天上での子羊の婚宴と最後の審判の幻視で締め括られる（第19章～第20章）。そして「天上のエルサレム」が天から下ってくる。万物の支配者としての神と子羊とが新しきエルサレムに光をもたらし、諸国民の栄光と誉れとが都にもたらされるのだ。古い契約の終わりが告げられて、新たな契約の始まりが語られる。生命の水、キリスト再臨の預言が最後にあらためて語られる。

「私はすぐに来る」と主イエズスの声があって、これに呼応するかたちで著者であるヨハネが「アーメン、主よ来て下さい」と答えて、黙示録は終わっている（「黙示録」第22章20節）。

第二回に扱うアングロ・ノルマン系の黙示録写本では、この場面が極めて重要な役割を演じていることをここで予告しておきたい。神への語りかけ、神から与えられる啓示を信徒を代表するかたちで神の御許にひれ伏して受けとめる、著者としてのヨハネの役割がいかに大きいのか、今更強調するまでもないであろう。なお黙示録については次の点を整理しておきたい。

①「黙示録」は、その外見はともかく人々に希望のメッセージを伝えるために書かれた書物であった。歴史的に見るとローマ帝国下の、おそらくはドミティアヌス帝治世下

(81～96年頃)で迫害に曝されていたキリスト者に勇気を与えるための書物であったと考えられている。

②「黙示録」の著者は、小アジアの沖合いにあるパトモス島での幽閉中にこれを著し、自ら本文中で‘ヨハネ’と名乗っている。

③「黙示録」の著者ヨハネは、初期キリスト教時代から福音書記者の‘ヨハネ’、すなわち12使徒の一人であるヨハネと同一人物と考えられてきた。少なくとも中世においてこれは疑問の余地のないこととされていた⁵。

以下、シャルトルの《聖ヨハネ伝の窓》の現状を詳しく見てゆくことにする。

Ⅲ. シャルトル大聖堂の《Baie 48：聖ヨハネ伝の窓》

《聖ヨハネ伝の窓》は、大聖堂の西正面から入ってすぐの右手側、南側廊の地上階に位置する窓である。これは西正面から入ると最初に出会う窓である。

イヴ・ドラポルトは、ステンドグラス総覧として今日も意義を失うことのない大著(1927年)において、《聖ヨハネ伝の窓》に関する箇所ではヨハネが書物を著す場面を、19世紀末のビュルトー神父の著書を引き合いに出しながら次のように説明している⁶。

「ビュルトー神父 L'abbé Bulteau はこの場面を、‘ヨハネが福音書を著す’場面であると説明するが、私にその見解は支持できない。というのも、これに続く一連の出来事と構図の取り方、つまり7つの教会を塔の形で描くので明らかだが、聖ヨハネはここで‘黙示録の著者’として描かれているのだ。」

聖ヨハネの目の前にある細帯の銘文は、中世末期の修復の際に書き直されたことが調査の結果知られている。ここに描かれる7基の塔は黙示録以外に典拠を持ち得ないのは明らかである。ドラポルトは彼の著で福音書記者としてではなく、黙示録の著者としてのヨハネを位置付けている。なおこの窓には現在以下のような4つの特徴が認められることを指摘しておきたい。

①身廊の地階窓で、これはもっとも小さな窓であること。

②ステンドグラスの各場面の読み取り順序が、他の窓と全く異なること。

初めに下から順に上へ四葉形の周囲を読み上げ最上部まで上った後、もう一度下から四葉形を上へと読み上げる。二度の上下運動をして場面を読むことになる。

③窓全体にグリザージュの装飾が多く施され、特にガラス内部と外部の両面にグリザージュ装飾が見られること。

④図像学的にも興味深い特徴が指摘できること。

以下に詳しくこれらの特徴について見てゆきたいと思う。窓の構造、色彩、読み取りの順序、そして各場面のディスクリプションへと続く。

ア. 《聖ヨハネ伝の窓》の構造

シャルトル大聖堂の地階窓は南北の側廊で各々 6 枚ずつ計 12 枚を数えるが、それらの中で《聖ヨハネ伝の窓》は既述のとおり、最も小型である。窓の大きさは高さが 7.85m、幅が 1.88m で、全表面積は 14.75 m²となる。ちなみにこの窓と向かい合わせに位置する身廊部北側の《ノアの窓》は、高さ 8.13m、幅 2.21m である。側廊部にある他の窓はすべて高さが 8m を超えている。幅に関しても同様なことが言え、現場で確認してもヨハネ伝の窓は他の窓と比してひと回り小さく見える。その理由として説明されるのは、西正面南塔の基部と近いために開口部を開けるのが困難であったという。

聖ヨハネ伝の窓の構造については、以下のとおりである【図 2】。

尖頭アーチ型の窓全体に内接する 6 個の円を上下に重ねて置き、2 つの円の接点を中心とするやや小さな四葉形を、これら 6 個の円を背景とするべく重ねて置く。最上部と最下部とに半分の四葉形が置かれていて計 6 個の四葉形よりなる。この時に背後に隠れてしまう円の半径より四葉形の中心にくる小型の十字の枝部分、つまり円の半径にあたる長さは図版から推して約 3 分の 2 程度となっている。円形もまた計 6 個となる。

円形の外周および四葉形の外周、さらに円を縦方向に区切る鉄枠が窓の構造の主要な形状を浮かび上がらせる。外枠をさらに細い帯状に鉄枠が囲んでおり、窓の形状を全体として見ると、上下方向を貫いて走る主要なモチーフとなっているのは四葉形である⁷。

イ. 窓の色彩

ステンドグラスの色彩について見ると、ヨハネ伝の場面はいずれも外周を赤ガラスの細帯で描き出しており、鉄枠の太い黒線とあいまって輪郭線が強調されて見える。ガラスの背景地の色はすべて青色で統一されていて、窓全体が青色に支配される。そのため青色を背景にして、意識的に限定して用いられた赤ガラスの色彩効果が発揮される。赤色と青地との対比が目立つように工夫されているのだ。

たとえば神とヨハネが直接対面する場面【図 3】や、ヨハネの死の場面における天上世界から注がれる光輝の表現などに赤ガラスが一際冴えて見える。こうした赤ガラスの使用がヨハネ伝窓の特徴の一つに加えられよう。

ウ. 各場面の読み取り順序

窓の各場面の読み取りの順序にも特徴がある【図 4】。

一般に中世のステンドグラスの読み取り順序は、左から右へ、下から上へと読み上げるのが原則だが、この窓では先述のとおり都合二回の上昇運動を繰り返す。このような読み取り順序はシャルトル大聖堂の他の窓では全く類例がない。これまで知る限り、12～13世紀のステンドグラスでは見られない複雑な順序である。この窓に興味を抱いた動機はこの読み取り順序の特異性にあった。果たして制作された当時のままであるのか、当然疑問がわいてくる。結論を先取りすれば、パリの古文書館やシャルトル市立図書館で古い資料に照らして検証した結果、今日の読み取り順序は19世紀を遡るものではなく、18世紀初めには異なる場面配置であったことが判明した。

従って、今後検討すべき問題点の一つは「読み取り順序」の検証にあるのは明らかである。以下に各場面のディスクリプションを試みるが、その際参考にするのは主にコレット・マネス、ドラポルト、さらにビュルトー神父の記録である⁸。中でも重要な文献はコレット・マネスの博士論文であり、それ以降の彼女の研究である。なお各場面に付された番号はコルプスによる⁹【図5】。

エ．ディスクリプション

No.1：「エジプト逃避」

由来が定かではない再利用のガラスである。幼児イエスを抱く聖母が驢馬に乗っている。それを、後ろを振り返りつつ導くヨセフ。驢馬の脚は断ち切られていてこれがもとの形ではないことは容易に見てとれる。ドラポルトによるとここにはもともと寄進者が描かれていたという。しかしすでにパンタールの時代にはこのガラスが入れられていたとのことである¹⁰【図6下】。

No.2とNo.3：寄進者像；盾職人と鎧職人

丁寧な描かれた建築物の下で二人の職人が共同して作業に精出す。左の盾職人は、細い列柱のある屋根の下で道具を用いて盾の表面仕上げをしている。盾は、上部がゆるくカーブを描くアーチ型で下が尖った形をし、百合や花文で飾られる。右の職人は、手に鑿を持ち、これを金槌でたたいて‘馬の鞍’らしきものを作る。棚の上や屋根の上にまで、馬の鞍のようなものが置かれている。No.3では、鎧師が向かい合い二人で共同作業をする。一人は座ってもう一人が立ち、力のこもる鍛冶場である。左の職人の頭の被り物が、顎まで続いた特徴のある形をしている。仕上がった鎧が一つ、職人たちの間に奇妙な形で割り込んで宙に浮く。これは先の馬の鞍と同様に、ガラスが修復された箇所である可能性を示唆している【図6上】。

No.4：「パトモス島へ追放されるヨハネ」銘文 S(anctus)IOH(ann)ES

高波にもまれつつ一艘の船が海に出る。ヨハネと従者の姿が船中に見え、船頭が帆を操る様子、縄の結び目の白い色が目立つ。一人の従者は右手を上にかざして指図をする。

青、白、赤のガラスで波は表わされ、ヨハネの顔、船頭の顔は 13 世紀だが、船の帆の黄色ガラスは 15 世紀の修復。網の結び目の表現が繊細で、海の波の表現などは、身廊部北側の向かいに位置する《ノアの箱舟の窓》との様式比較が可能であろう【図 7 上】。

No.5：「黙示録を執筆するヨハネ」

ヨハネの周囲には 7 本の教会の塔が見える。先端に小さな十字架が付いた色とりどりの塔はにぎやかな印象を与える。ヨハネが手紙を送ったアジアの 7 教会を、これらの塔は表わしている。ここで教会の設立と信仰普及への使命が描き出される、とマネス等は考えている。ヨハネの頭部は 14 世紀、広げた巻物にある銘文；IN PRINCIPIO ERAT VER は、15 世紀の修復で、さらにはヨハネの全身を囲む青い身光 halo も同じ 15 世紀の修復である。この時の修復の際、教会の塔の一部が隠されてしまったほどであった。手に持つ道具などにも後補が多く、この場面は特に後世の手が加えられている¹¹【図 7 上】。

No.6：「ドルシアナの蘇生」

ドミティアヌス帝の死後、流刑地パトモス島からエフェソスに帰還したヨハネは、一人の女性信者ドルシアナを蘇らせる。ドルシアナはヨハネの帰国を長い間待ち望んでいた女性だが、願い虚しく死去してしまっていた。生前、彼女が施しをして助けた多くの貧民がヨハネに彼女を蘇らせるようにと望む。彼らの願いを受けいれたヨハネが、「私のために食事の支度をしなさい」と命じると、死んだはずのドルシアナは死の床から起き出してすぐに台所に向かったと、聖者伝は伝えている。

場面は死の床で半身を起こしたドルシアナを描く。斜めになった床で裸の上半身を起こして両手を前に差し出したドルシアナの顔は、目鼻だちが美しくシャルトルのガラスの中でも女性像の一つとして特筆に値する。《良きサマリア人の窓》のエヴァとも共通する描き方が彼女の姿に確認できるとロティエは述べている¹²。画面左に立つヨハネの顔は 15 世紀でヨハネは祝福の身振りをしている【図 8 上】。

No.7：「奇跡を目のあたりにして驚く人々」

一人の若者が左に立ち、両手を隣の場面に促すような仕草で、群集の視線を導いている。7 名ほどが確認でき、着衣の色や身振りで変化がある。ある程度の修復が確認される【図 8 上】。

No.8：「哲学者クラトンの教えにより宝石を砕く二人の若者」

クラトンが右に座り、弟子に宝石を砕いて現世の富の虚しさを教えている。二人の若者は立派な台座の上に置かれた、赤と緑の物体を金槌のようなもので叩いて砕く。ヨハネはその場に居合わせて、これが富からの解放ではなく高慢さゆえの自己満足であると説いた。クラトンは白い上衣を身に着けている【図 9 上】。

No.9：「クラトンの前で砕かれた宝石を元の状態に戻すヨハネ」

宝石を砕くよりもそれを売ってお金に変え、貧しき者達に施しをするのが神の教えに適

うと、ヨハネは説く。それではもし貴方の神が正しいなら、砕かれた宝石を元通りに戻して見せて欲しいとクラトンが言うと、ヨハネは神に祈る。そして宝石は元通りになった。ヨハネの顔は後補だが、左手に持つ丸い物体 9 個は、元通りになった宝石を表わすと思われる。銘文：S(an)C(tus)IOH(ann)ES【図 9 上】。

No.10：「薪と貝殻を黄金と宝石に変えるヨハネ」

左にヨハネ、右に二人の若者が、薪の束と貝殻を皿にもって後ろ向きでヨハネの方を振りかえる。この話は聖者伝によると次のとおり。

アティクスとウジェーヌ Atticus et Eugène という二人の若者がヨハネの教えに共鳴し財産を投げ打って貧しい人に施しをする。一文無しになった若者二人はある日、かつての召使に出会う。召使は豪華な着物を身につけていた。後悔した二人にヨハネは「もとの財宝が惜しいなら、すぐに薪と海辺で貝殻を拾って持ってきてなさい」と言う。彼らがそうするとヨハネは薪を黄金に変え、貝殻を宝石に変えた。しかし後に後悔した二人は、またヨハネに頼んでそれを元通りに変えてもらうことになる【図 10 上】。

No.11：「ヨハネが変えた黄金と宝石を両替商が吟味し、品質を保証する」

これほどに見事で良質な黄金や宝石はこれまで見たことがない、と両替商からお墨付きをもらう。画面は右に立つ一人の若者が、薪の束の中から一本を取り出して、両替商に示している。机の上には銀と金の貨幣が十字架の印をつけて置かれている。両替商の顔は 15 世紀の修復である【図 10 上】。

次いで場面は四葉形へと続く。既述のとおりもう一度下降し、下から順に四葉形を上昇しながら読み進む。

No.12：「スタクテの死」

結婚して間もない男スタクテが死んで、彼の魂が赤子の姿で口から出てゆこうとする場面。悪魔が二人、死者の魂を奪おうと待ち構えている。妻や親戚一堂の集まる死の床の場面では、赤子の形の魂の表現が 13 世紀当時の姿を良く残している。二匹の悪魔はともに 15 世紀の修復である【図 7】。

No.13：「ダイアナ神殿の大祭司アリストデムスの前に立つヨハネ」

異教の大祭司アリストデムスがヨハネの信仰を試そうとして、尋問する場面。銘文：S(an)C(tus)IOHANNES は 15 世紀で、ヨハネの頭部も 15 世紀である。

アリストデムスは右手に棒状のものをもち、ヨハネを詰問している様子が描かれる。ヨハネの後ろには扉口のようなものがあり神殿の内部を描く。大祭司の後ろには従者が付く。アリストデムスの頭は 13 世紀で、彼の被り物の赤ガラスと玉座のごとき豪華な椅子は、いずれも 13 世紀の作例である【図 8】。

No.14：「毒杯を仰ぐヨハネ」 銘文：SCS.IOHANNES は 13 世紀。

大祭司アリストデムスの前で毒杯を仰ぐヨハネは、すでに同じ杯から毒を飲んで死せる二人の罪人の死体が下に置かれた場所に居る。右方隅では家来が、毒蛇をバケツのような容器で碎いて毒入りの飲み物を調合している。この男の悪人顔がうまく表現されている。毒蛇は3匹バケツから顔を覗かせている。上部の空には神の手が雲間から現れてヨハネを加護している。注意してみるとこの場面には、ヨハネの頭上、大祭司の足元など、背景地の青ガラスに、後述するように、外側から描かれたグリザージュによる繊細な唐草模様が施されているのがわかる【図9】。

No.15：「キリストとヨハネの出会い」

十字架光輪をつけたキリストは右手を祝福の身振りで、左手には巻物を持って画面の右に立つ。キリストと対話するような形でヨハネは左にいる。彼らの左右には樹木があって戸外の情景を想わせる表現である。丸いキノコ状の樹の表現は独特である。

ヨハネは心持ち腰をかがめ恭しい仕草でキリストと対峙する。ヨハネの生き生きとした手つきが彼の雄弁さを物語る。キリストの全身を覆う波状の身光は、「No.5」の黙示録を書くヨハネに付されていたものと同様に15世紀の修復である。両者の足の微妙な変化もおもしろい。

マネス等によるとこの場面は、高齢になったヨハネのもとにキリストが現れて死期の近いことを告げる場面であると説明されている。次の「No.16」がヨハネの死の場面となる。銘文：S(an)C(tu)S IOH(ann)ES XP(isti) は13世紀で、銘文帯の下には柱頭付きの小柱が一基ある。四葉形や円の幾何学形の中に上下を意識させ場面の区切りを見せる工夫がこの柱にある。他の多くの場面で、枠取りの下に水平帯を設けて建築モチーフで区切っていて、登場人物達の足の変化や高低をつける工夫である。この場面にも背景地の青ガラスに、外側から唐草模様のグリザージュ装飾が施されている。下の毒杯を仰ぐヨハネの場面と同様に、これが重要な場面であることが暗示されている【図10】または【図3】。

No.16：「石棺の中で祈るヨハネ、栄光に満ちた死」

キリストから死の告知を受けたヨハネは、自ら墓を掘ってそこに横たわり死を迎える。光線が赤く幅広い4本の帯となってヨハネに降り注ぐ。三葉アーチ型の建築モチーフは、豪華な教会堂にヨハネの墓が置かれている様子である。墓は3基の柱頭付き小柱により支えられて、側面には円と四葉形モチーフが交互に並んで4個づつ描かれている。緑色の棺の蓋と棺の内部が同色の丁寧な装飾で、三葉形アーチはシャルトル大聖堂そのものを暗示するかのようである【図11】。

No.17 と No.18：「香を振る天使」

足元の雲の表現、細い水平帯の表現が丁寧で、天使の持つ香炉の長い鎖が掻き落とし技法によるグリザージュ装飾で飾られる。

No.19：「ヨハネの魂を迎える天使」

最頂部の2天使は下方を向いて両手を伸ばす仕草でヨハネを迎える。彼らの手にする赤い衣の端が風に舞っている。下の4天使とあわせて計6人の天使がヨハネの死を賛美する【図11】。

最後にこれら19場面を囲む形で蔓草装飾が窓全体の外枠を形作る。蔓草装飾とヨハネ伝の物語場面とのあいだには一見して濃密な地文様の空間がある。よく見るとごく小さな四葉形が隙間無くびっしりと重なり、色も青と赤、そして黄色の中心は方形である。これはヨハネ伝主題の背景地が澄んだ青色であるのと対照的に、タピスリをも想わせる触覚を刺激する地文様となっている【図1】。

以上見てきたとおり、《聖ヨハネ伝の窓》の図像学的な特徴をまとめると次のようになる。「No.4：パトモス島への追放」に始まり、数々の奇跡（死人の蘇生、哲学者との対話、宝石を元通りに蘇らせる、薪・貝殻を黄金・宝石に変える）を繰り広げる場面が描かれる。異教の大祭司とのやりとりの結果、ヨハネは毒杯を仰いでも死なず、キリストの加護を受けて最後には安らかな栄光の眠りにつく。

明るい希望に満ちた彼の生涯をこの窓は、とりわけ財産に執着することなく、神の教えを守り、貧しき者に施しをすることで救いに至る道を説いているように思われる。黙示録を著すヨハネが登場して、キリスト自身と直接にまみえることによって神の加護が保証されていることを描いている。特に印象的なのは「No.15：神とヨハネとの出会い」の場面であった。ヨハネとキリストは二人とも殆ど同じ高さで立ち、両者対等な関係で出会っている【図3】。

オ．典拠について

シャルトルの聖ヨハネ伝については、そのテキストとなる「聖者伝」や図像源泉が具体的にどのようなものであったのか特定されていない¹³。そうした現状ではこれまでの解釈のままで良いのか、検討の余地は充分にあると思われる。

そもそもマネスやロティエの研究でヨハネ伝の窓は言及されてはいるものの、本格的な図像研究はまだなされてはいない。少なくとも私の知る限りシャルトルに限らず、同時代ゴシック大聖堂で相当数見られる「聖ヨハネ伝」のステンドグラスに関して、これまで本格的な研究はなされていない¹⁴。

冒頭にあげたとおりこの主題に関しては、ヨハネが福音書記者としてよりもむしろ黙示録の著者として登場している。同時代のフランスに残る「聖ヨハネ伝」の窓は、昨年度行った現地調査によれば、計12の大聖堂に同主題のガラスの存在が確かめられた。第3回の論文でこれを報告する予定だが、英国では唯一リンカン大聖堂に残る3場面が知られている¹⁵。他の作例はすべてフランス国内である。それ故、ヨハネ伝のテーマは、シャ

ルトルを含む北フランスないし英国中世をも射程に入れた黙示録図像の多彩な問題への足がかりとなるテーマであることがわかる【図 12】【図 13】。

ところで問題の《聖ヨハネ伝の窓》では、ディスクリプションで述べたとおり、近年の修復の結果興味深い事実が報告されている。オルレアンの地方文化財保存局（D.R.A.C.）で調査報告を調べていた折に見出した、パリの国立科学研究所（CNRS）の研究者クロード・ロティエ氏らをはじめとする研究である。ここに新たな視点として「窓の装飾性」をとりあげて、第一回論考の結びに代えたいと思う。

IV. 「聖ヨハネ伝の窓」の装飾性 ——結びに代えて——

クロード・ロティエは、シャルトル大聖堂で行われている近年の修復の成果としてステンドグラスの窓の装飾性について論じ、《Baie48》について以下のような報告をしている¹⁶。

中世の技法書テオフィルスの『諸技芸提要』には、グリザージュの濃淡を三段階に区別してガラス表面に絵画表現を描いたことが語られるのは周知のとおりだが、これは通常、ガラスの内側に見られるものと考えられがちである。しかしながら、既にこれまでも研究者の指摘があったように、中世からルネサンスにかけてガラスの外側にもグリザージュ装飾が施されていることが報告されてきた¹⁷。12～17世紀に至るまでステンドグラス内外の両面においてグリザージュ装飾が見られる、という。

シャルトル大聖堂の場合、こうした外側グリザージュ装飾は南北翼廊や身廊部の側廊窓に見られる。シャルトルにおける一般的な傾向としてロティエは、この種の装飾は南側に多く北側にはあまり多く見られない、と述べる¹⁸。ただ、当初からこのようであったという確証はなく、気象条件などにより北側の装飾が保存されにくかったという事情もあったに相違ないとロティエはいう。

ところで、外側のグリザージュ装飾が特定の部位に施されたとすれば、何故その場所であればならなかったのか。第一の理由として考えられるのは、内側のグリザージュの描線を補強するためであったという¹⁹。同じく外光を抑えて内部のグリザージュの装飾効果を高める狙いもあったとロティエは指摘する。具体例の一つとして彼女が挙げるのは、《Baie44: 良きサマリア人の窓》である。この窓で、外側に施されるグリザージュはアダムの衣や顔に見られる。アダムの目、額、毛髪などにこれが顕著に認められる、という。

これに対し同窓では、樹木、岩、建築物などに外側のグリザージュ装飾はまったく見られない。また南側廊の《Baie38: 聖母の奇跡の窓》の外側のグリザージュ装飾は、同じガラス絵師の手になると考えられる、北側の身廊部窓《Baie45: 聖リュバンの窓》や

《Baie39：聖ニコラの窓》には見られない、という興味深い事実も指摘されている。

こうしたステンドグラスの内外に施される“二重グリザージュ技法”とでも呼びうる装飾は、英国のカンタベリ大聖堂でも確認されている。しかしながら装飾理念においてフランスとはまるで対照的であるという。英国では一般に自然景に対して外側のグリザージュ装飾が施され、神や人物表現にはこれが見られないことが、観察した結果わかったのだ。

この指摘は、英国とフランス中世のステンドグラス装飾における相違を示していて大変おもしろい²⁰。

シャルトル大聖堂の「聖ヨハネ伝の窓」に話を戻せば、この窓では既述のとおり外側のグリザージュが特色ある形で施されていた。四葉形の青色ガラスを背景にして優美な唐草模様がグリザージュで表わされたのは、場面「N.15」と「N.14」であった【図10】【図9】。前者はキリストとヨハネが直接に出会う場面であり、二人の左右には樹木が描かれており【図14】、緑の波打つ大地にも繊細な装飾が活気を与えている。

そもそもキリストとヨハネが直接に対話を交わす、これはきわめて異例な表現ではないだろうか。シャルトルの窓でキリストに対し堂々たる姿で一人の人物が一对一で向き合う構図は他にあるだろうか。少なくとも私の知る限り、ここ以外には無いように思う。次回詳しく見る予定だが、英国中世の黙示録写本には、この場面と類似した二人の出会いが見られる。このような類似性を考慮に入れると、「ヨハネに死期の近づいたことを告知に現われたイエス」という、ドラポルトはじめコレット・マネスに至る場面説明を再検討しなければならないだろう。

ロティエ論文の終わりにある一文を最後に示しておきたい。答えがどこかに隠されているように思われるからである。

「シャルトルで確認される外付けグリザージュ装飾の中でもとりわけ《Baie48》には特別な描き方が認められる。すなわち四葉形の青ガラスを背景地として、外側からの繊細な唐草模様が施されているのである。」他ならぬキリストとヨハネの出会いの場面に、特に念入りで繊細、優美な装飾が施されたことをこの一文が示している²¹。

¹ N.J.Morgan and Brown, *The Lambeth Apocalypse, Manuscript 209 in Lambeth Palace Library*, London, 1990, p.127. 『ランベス黙示録』、『メッス黙示録』等のラテン語黙示録写本にはヒエロニムス註解が載っている。Cf. ナイジェル・モーガン「イギリス13世紀中葉の挿絵入り黙示録写本」（黒岩三恵訳）【注2の辻佐保子（日本版監修）『ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ図書館蔵本ファクシミリ版 黙示録 MS R.16.2』11-29頁に所収論文】ヒエロニムス、アウグスティヌスによる黙示録註解については以下の著書を参照のこと

・ Guy Lobrichon, *La Bible au Moyen Age*, Picard, Paris, 2003, esp. pp.109-

² 中世美術における「ヨハネ黙示録」のテーマについて近年の代表的研究として、イヴ・クライン、イヴ・クリスト、ギィ・ロヴリション、辻佐保子氏の研究が注目される。

- Yves Christe, *L'Apocalypse de Jean, sens et développements de ses visions synthétiques*, Picard, Paris, 1996.
- Guy Lobrichon, « Jugement dernier et Apocalypse » dans *De l'Art comme mystagogie, Iconographie du Jugement dernier et des fins dernières à l'époque gothique*, CESC, Poitiers, 1996, pp.9-18.
- Edited by Richard K. Emmerson and Bernard McGinn, *The Apocalypse in the Middle Ages*, Cornell University Press, New York, 1992
- 辻佐保子『ロマネスク美術とその周辺』、岩波書店、2007年
- 辻佐保子（日本版監修）『ベアトウス黙示録註解 アローヨ写本』（岩波ファクシミリ・エディション）、同『ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ 黙示録 MS R.16.2』岩波書店、2006年他

³ Yves Christe, « Le portail Saint-Etienne à la Cathédrale de Chartres au regard des Bibles Moralisées », dans *ARTE D'OCCIDENTE, temi e metodi studi in onore di Angiola Maria Romanini*, 3 vols, 1999, vol 2, pp.847-856.

⁴ 薔薇窓と黙示録の関係から注目したいのは、特に最近の研究では以下のもの。

- Françoise Perrot, « La Rose de la Sainte-Chapelle et sa reconstruction » dans *La Sainte-Chapelle de Paris, Royaume de France ou Jérusalem céleste ?*, Actes du Colloque, Paris, Collège de France, 2002. 報告書がBrepols Publishers (Turnhout, Belgium) から2007年末刊行の予定。同じペロ夫人のサント・シャペルの新刊本には洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネの二人ヨハネ伝窓への新たな言及がある。私の興味と近い問題が示されており注目したい。
- Jean-Michel Leniaud et Françoise Perrot, *La Sainte-Chapelle*, Paris, 2007, pp.143-144.

⁵ 聖ヨハネについて；キリストの12使徒の一人で4福音書記者の一人。

ゼベタイの子で大ヤコブの弟であり父と同じ漁師であったが、キリストの召命を受けてペテロ、ヤコブと共に従った。ヨハネは使徒中最も若く主に愛された弟子と言われ「最後の晩餐」に際して主の胸にもたれかかる姿で描かれることが多い。「磔刑」では聖母マリヤと共に十字架の下に立ち、主の受難にあたっては聖母を母として迎えるよう命じられてそれに従う。キリスト昇天後ペテロと共に布教に努め、後にドミティアヌス帝統治下でエゲ海のパトモス島に流刑に処されて、そこで「黙示録」を書いたとされる。帝の没後エフェソスへの帰還が許されて第4福音書を書いたとされる。現代の聖書学では「黙示録」と「福音書」の著者は別人とされるが中世時代にはこれを同一視していた。ヨハネの生涯について13世紀後半のドミニコ会修道士ヤコブス・デ・ヴォラギネ著『黄金伝説』に詳しい。これ以前の比較的まとまりのある初期ヨハネ伝の図像がシャルトル大聖堂の窓である。ヨハネについては特に以下の著作を参照のこと。

- Jean Colson, *L'Enigme du Disciple que Jésus aimait*, Paris, 1969.
- Jeffrey F. Hamburger, *St. John the Divine, the Deified Evangelist in Medieval Art and Theology*, University of California Press, 2002.
- 三浦アンナ『藝術に現れたヨハネ』岩波書店、1954年（第一刷）、1983年（第二刷）

⁶ Yves Delaporte, Etienne Houvet, *Les Vitraux de la Cathédrale de Chartres*,

Histoire et Description, 1926 (4vols), pp.160-164.

⁷ 四葉形が窓に多用される意味に着目して以下の拙稿でも触れた。

・高野「シャルトル大聖堂のステンドグラス《Baie10：グリザーユの窓》」、清泉女子大学キリスト教文化研究所年報、Vol.15、2007年、97－115頁。

⁸ Colette Manhes-Deremble, *Les Vitraux narratifs de la Cathédrale de Chartres, étude iconographique*, (Corpus Vitrearum), France Etude II, 1993, pp.182-190, pp.205-206.

・Id. *Etude iconographique des Verrières basses de la Cathédrale de Chartres*, (Thèse de doctrat de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales) ; Paris,1989, pp.137-143., pp.938-961.

・L'Abbé Bulteau, *Monographie de la Cathédrale de Chartres*, 1887-1901, vols, pp.294-302.

⁹ Colette Mahnes-Deremble, *op.cit.*(1993), pp.182-190, pp.205-207 et pp.372-373.

¹⁰ A.Pintard, *Description des vitrages de l'église cathédrale de Notre-Dame de Chartres et explication des histoires peintes dans ces vitrages, suivies d'additions et observations*, début de XVIII e siècle, (Hérisson et Roux), Chrtres, Bibliothèque municipale, ms.1509.

¹¹ Id., *Vitraux de Chartres*, Zodiaque, 2003, p.226.

マネスによると大聖堂にはヨハネ自身の手になる福音書が聖遺物として崇敬を集めていたという。

¹² Claudine Lautier (注16論文) p.29.

¹³ 典拠については次の書物参照のこと。

・Colette Manhes-Deremble, *op. cit.*(1993), pp.182-183

Cf. Paul Meyer, *Les légendes hagiographiques dans l'Histoire littéraire de la France*, tome 33, Paris, 1906 .

・Martinov, « Iconographie de S. Jean l'Evangéliste » *Revue de l'Art chrétien*, 1879他

日本語では『黄金伝説』がもっとも入手しやすいが、周知のとおりこれはシャルトルのステンドグラスよりも後代の伝説集成。

¹⁴ コルプスをはじめドラポルトなどの基本書にある解説の他には、特にコレット

・マネスの博士論文がこの主題を詳しく論じて参考になる。Cf.Colette Deremble-Manhes, *Etude iconographique des verrières basses de la Cathédrale de Chartres*, Paris (Thèse de Doctrat de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales), Paris, 9 Juin 1989 ; en particulier vol.1, pp.137-143.

¹⁵ リンカン大聖堂については以下の著作参照のこと。

・N.Morgan, *The Medieval Painted Glass of Lincoln Cathedral*, (Corpus Vitrearum Medii Aevi), Great Britain, London, 1983, p.31.

¹⁶ Claudine Lautier, « L'Usage de la Grisaille sur la Face externe des Vitraux de la Cathédrale de Chartres », *VITREA ; Revue du Centre International du Vitrail*, No.5 et 6, 1990, pp.23-29.

¹⁷ 例えばFrodl-Kraft, M.Caviness, J.Lafondらの名前が上記の（注16；ロティエ論文）に挙げられている。

¹⁸ Cf.Cl.Lautier, *op.cit.* p.24. ロティエによればシャルトルの北側で、例外的に多数の外側グリザーユがあるのは《Baie43：聖エウスタキウス伝の窓》であるという。最近修理された北薔薇窓の鳩に外付けグリザーユが確認されたとのこと。(Patrimoine restauré en region Centre, No.11, 2002, Septembre,

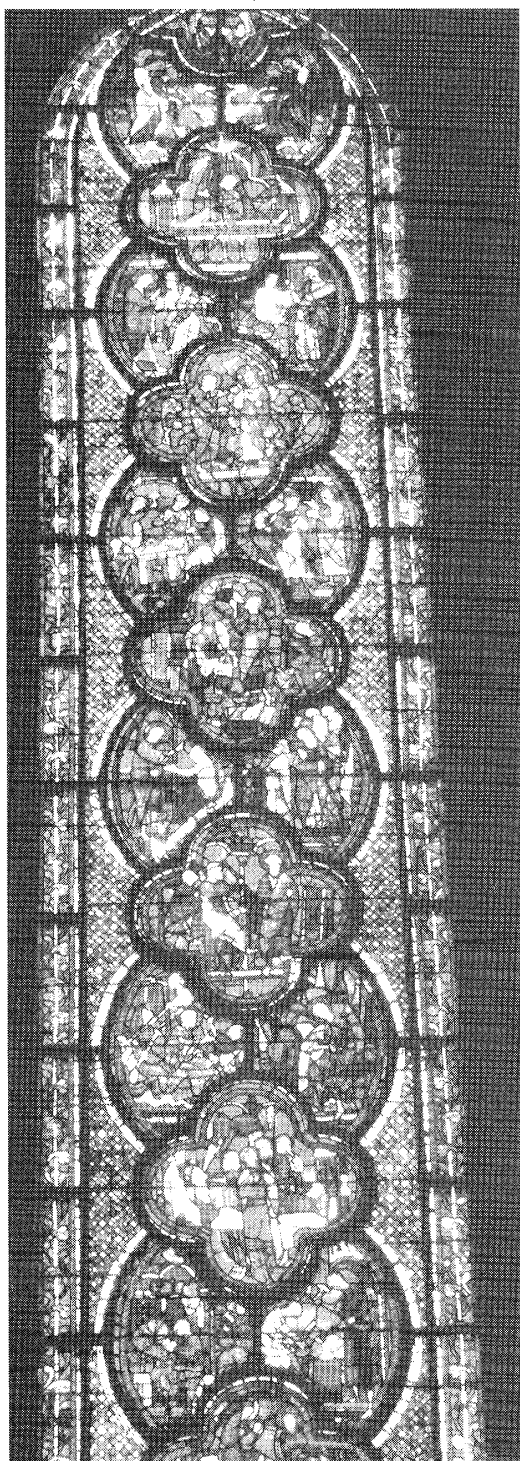
p.12より). 大聖堂のステンドグラスの修復全般については以下の論考を参照のこと。

- Claudine Lautier « Les Restaurations des vitraux de la Cathédrale de Chartres du moyen âge à nos jours », *La Sauvegarde de l'art français*, Cahiers 12, 1999, pp.6-19.
- Id. Les Vitraux de la Cathédrale de Chartres, Reliques et images, *Bulletin monumental*, Tome 161-1, Paris, 2003.

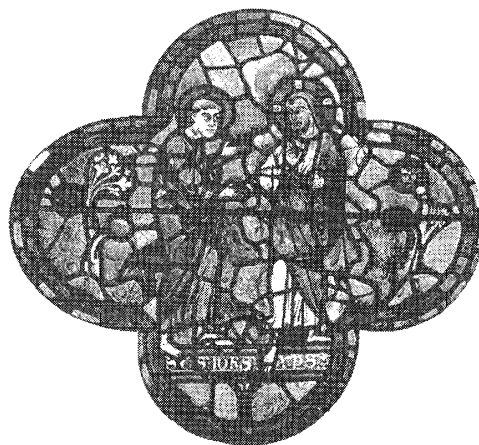
¹⁹ Cl.Lautier (注16論文) op.cit., P.26.

²⁰ Cl.Lautier, loc.cit.これは英国カンタベリ大聖堂に見られるのと全く反対の装飾原理であることが指摘される。次回の英国黙示録との関連で問題にしたいところである。

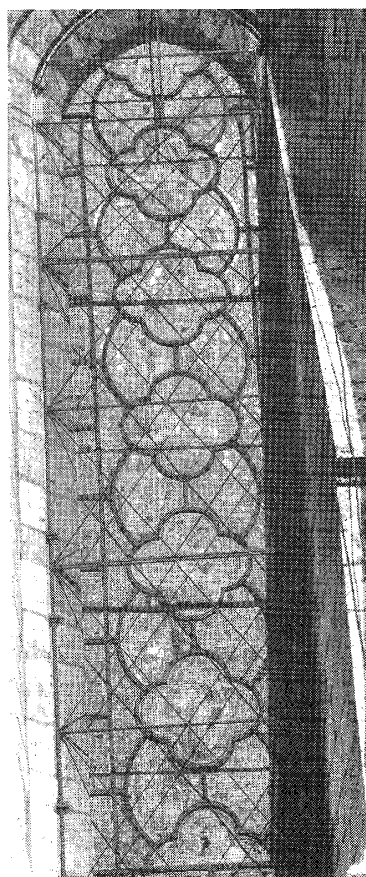
²¹ ロティエによると外側のグリザーユはパリの国立中世美術館蔵《死者の復活》【図15】、サント・シャペル、トロワのサン・チュルバン聖堂のステンドグラス等にその好例が見られるという。



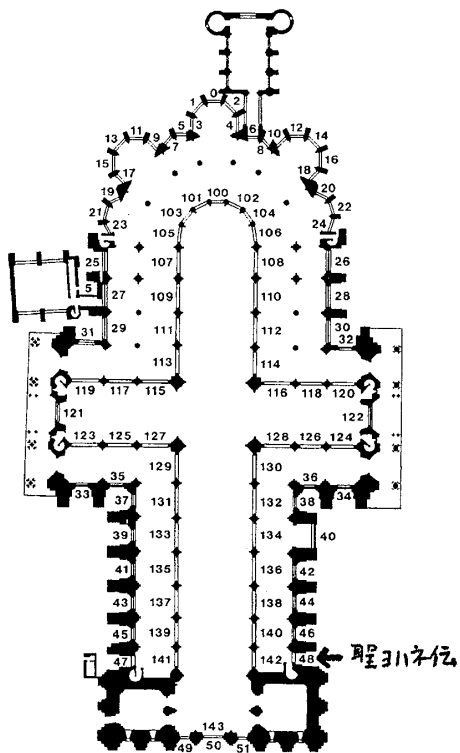
【図 1】 聖ヨハネ伝の窓、シャルトル大聖堂南側廊、1205-1215 年



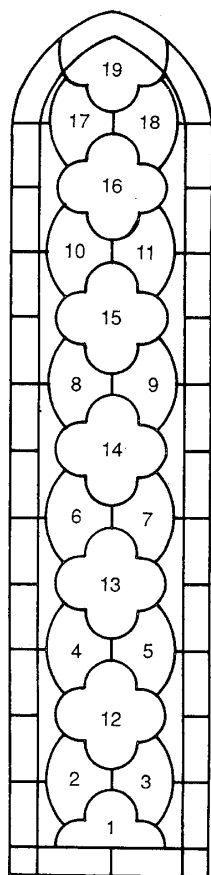
【図 3】 キリストとヨハネ（場面 No.15）



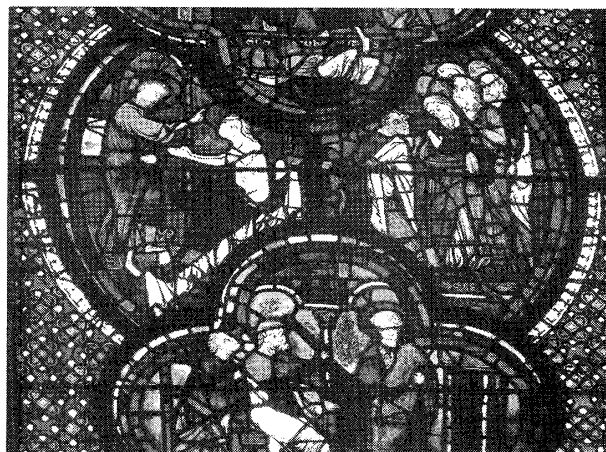
【図 2】 聖ヨハネ伝の窓（外側）



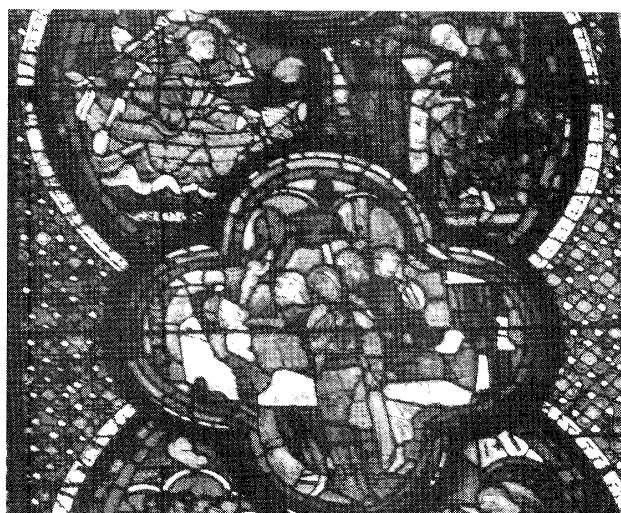
【図5】ステンドグラスの配置図



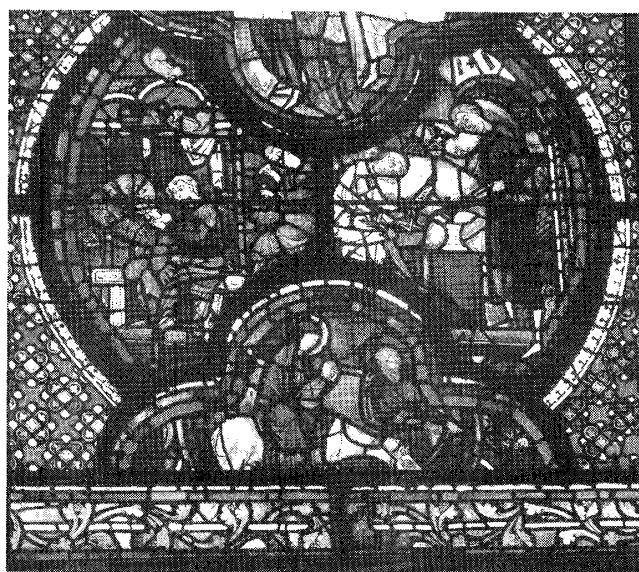
【図4】読み取り順序（現状）



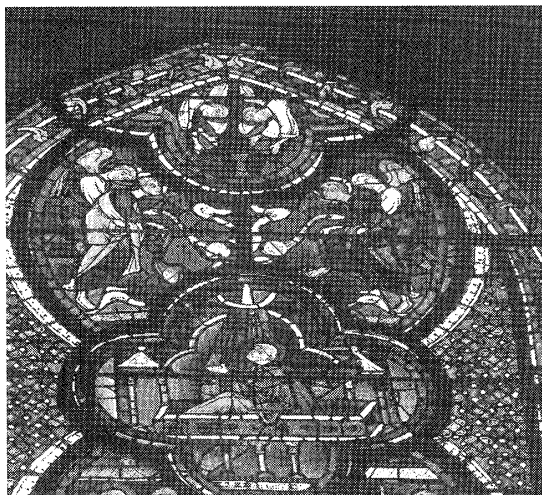
【図8】聖ヨハネ伝（Nos.13, 6, 7）



【図7】聖ヨハネ伝（Nos.12, 4, 5）



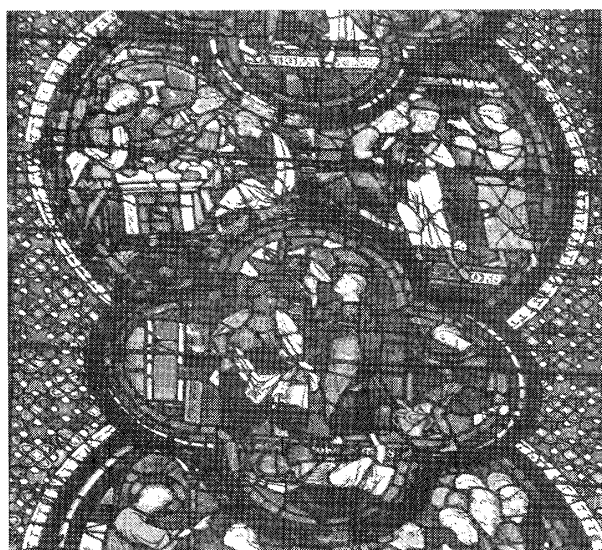
【図6】聖ヨハネ伝（Nos.1～3）



【図 11】 聖ヨハネ伝 (Nos.16, 17 ~ 19)



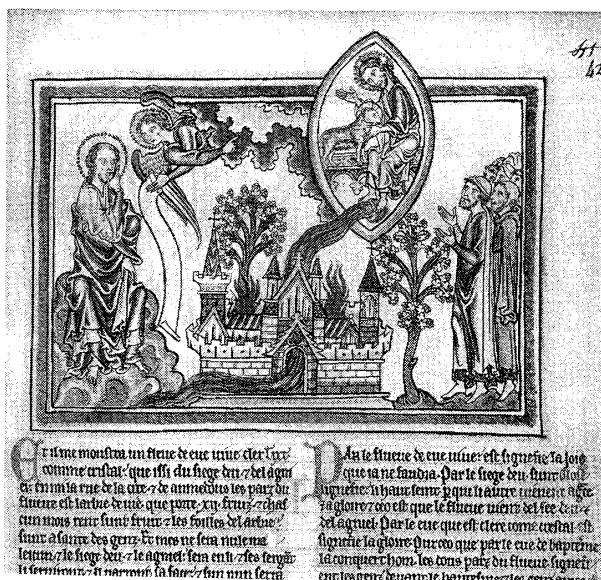
【図 10】 聖ヨハネ伝 (Nos.15, 10, 11)



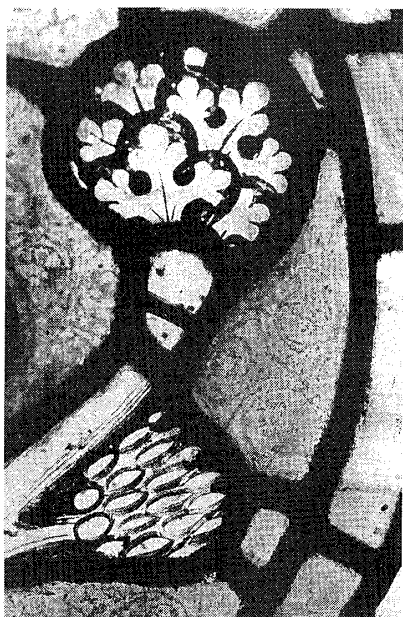
【図 9】 聖ヨハネ伝 (Nos.14, 8, 9)



【図 12】黙示録を執筆するヨハネ『註解付き聖書』、シャルトル市立図書館、Ms.385, vol.XIX, fol. 155, 13 世紀半ば



【図 13】生命の河（黙示録 22 章）『パリ黙示録』、国立図書館、Paris, 【Ms.Français403】、1250-55 年頃, fol. 42r



【図 14】背景地の唐草模様、外側からグリザユ装飾、【図 3】部分 (Cl.Lautier 論文 dans *Vitreia*, No.5 / 6, 1990, Fig.6)



【図 15】死者の復活（サント・シャペル旧在ステンドグラス）、国立中世美術館、パリ、1200 年頃